

山村における地域看護学実習の学習成果 —— 対象理解の視野拡大を目指す学習活動の意義 ——

大澤真奈美, 鈴木美雪, 塩ノ谷朱美
飯田苗恵, 原美弥子, 齋藤基
群馬県立県民健康科学大学

目的：山村における地域看護学実習の成果を、看護の対象理解の視野拡大を目指す学習活動の意義という観点から検討する。

方法：平成18～22年度までの2年次履修者のうち、同意が得られた学生76名の、実習終了4ヶ月後のレポートの記述内容から学習成果を質的に分析した。

結果：学習成果は【交通機関が少ない生活の不便さ】【生活を不便と感じていない住民の意識】【不便な生活を補い合う隣近所の手助け】【地域で生活する人々の活気】【地域の文化を大切にする気持ちや行動】【住民同士の繋がりや交流の強さ】【医療へのアクセスの悪さに対応する健康自己管理意識の高さ】など15のカテゴリに集約できた。

考察：本実習の学習成果は、看護の対象を実際の生活環境もあわせて観察することで、対象理解の視野を拡大するという意義を持つものである。

キーワード：地域看護学実習, 対象理解

I. はじめに

看護においての対象理解は、対象に沿った援助の判断をするための前提であり、出発点である。対象を理解し、その人らしい生活を送ることができるよう援助するためには、長年住み慣れた生活環境、その中で培われた地域の風土、文化や健康に対する価値観、家族や近隣の人々との繋がりなどにも視野を拡げた、多面的な情報が必要であり¹⁾、看護の基礎教育課程において対象の生活環境を実際に観察する機会を持つことは、対象理解の視野を拡げることに繋がると考える。

本学では、地域看護学の導入に位置する実習として、2年次後期に「山村部への観察実習」を実施している。学生は県内の特徴である山村僻地の町村に実際に出向き、1日をかけて地域踏査や住

民へのインタビューを行い、そこに住む人々に特徴的な生活環境や暮らしぶり、文化や価値観などの観察を行う。学生はこの実習をとおして、人々が住む地域の特性を知り、人々がどのような文化や生活環境を背景に健康に対する価値観を持っているかを知る。そして学生は人々が生活環境と調和しながらどのように自らの健康を維持しているかを考え、看護の対象としての人間理解を深める。学生が看護の学習の早期から、人々の生活の場に直接出向き、生活環境を理解する実習を体験することは、その後に積み重ねられる看護過程の展開学習において、より拡大した視野から対象を観察しようとする捉え方に繋がると考える。看護学教育の在り方検討会²⁾では大学卒業時の到達目標を明確にしているが、その中での大項目に、ヒューマンケアの基本に関する実践能力の項目を到達目

標として挙げている。そしてさらに小項目として、個別な価値観・信条や生活背景を持つ人の理解を挙げている。個別な価値観や信条、生活背景は、疾病や傷害等により入院している患者からの情報収集からはイメージが拡がりにくく、日常的な生活の場に出向き、実体験として経験することで、対象理解の視野を広げることにつながると考えられる。

地域には、都市部、農村部、山村部など多様な環境特性があるが、人々は地域の環境と調和し、環境に適応した健康を保つための行動が定着している。特に都市部から離れた山村部などの人口過疎地域では、保健医療福祉サービスが量的に少なく、交通の便も悪いために、サービスへのアクセスも不便であるなどの特徴を持ち、健康を維持する上での不利な側面が多い。反面、古くからの文化的な伝統や行事を大切にすること、自ら農産物を栽培し、採取した農産物を食して生活することや、近隣住民と交流を持つことで共に助け合い、支えあう生活を送るなど、人々の健康維持に好ましい側面もあり、これにより健康を維持している。学生が人々の生活環境や暮らしぶりを理解する事は、生活に即した看護援助の方向性を見いだすことに繋がると考える。

対象理解との関連において、山村部などの特徴のある地域を実習フィールドとし、その成果を報告している文献は見あたらない。一方、在宅看護実習においては地域に出向き、対象の家庭を訪問することにより、家庭内での家族や生活を知ることでの対象理解の深まりの成果を明らかにするもの³⁻⁹⁾は多く報告されており、家庭生活を実際に観察する実習の成果は既に明らかにされている¹⁰⁾。また病院や施設外の対象の生活の場に出向き、個人を対象として観察することでの対象理解の深まりに焦点をあてた研究も報告されている¹¹⁻¹³⁾。しかし対象の生活環境などの実際の観察による対象理解の拡がりに焦点をあてた研究は見られな

い。そこで、本研究では地域健康看護学の山村部での観察実習での学びが、対象理解の視野を広げる事を目指す学習活動として、どのような意義をもつか明らかにしたいと考えた。

本研究の目的は、山村における地域看護学実習の成果を、看護の対象理解の視野拡大を目指す学習活動の意義という観点から検討する事である。

II. 研究方法

1. 山村での観察実習の概要

1) 実習の位置づけ：本学では2年次前期 Semester において、看護技術学の科目の中で看護の対象理解を含む基本的な看護のアセスメント技術を学習する。そして2年次後期から3年次前期にかけて、母胎期、乳幼児期などの人間の発達段階に応じた対象理解と看護過程の展開を講義演習で学習し、3年次後期から実習に入る。その中で地域健康看護学の導入科目として、「地域健康看護学概論」を2年次後期 Semester に配置し、本科目の授業後半で、本県の特徴である山村を対象として1日の観察実習を行っている。そして、3年次前期 Semester で地域健康看護学の看護過程の展開を講義演習で学習し、後期 Semester で実習へと学習が積み重ねられていく。

2) 実習目的：山村地域において独自の文化を育み、自らの健康を守るために環境との調和を保ちながら生活する人々を理解する。

3) 実習方法：観察の対象は、県内の山村部に位置する4町村である。学生は10名のグループを編成し、割り当てられた1つの対象地域について、事前に既存資料を用いて情報収集を行う。その後対象地域に実際に1日出向き、地域踏査により人々の生活環境や暮らしぶりを観察して歩き、人々へのインタビューを行い情報を収集する。帰校後のカンファレンス終了後、レポートを提出する。レポートの課題は、「カンファレンスをとおして、山村地域において自らの健康を守るために、

環境との調和を保ちながら生活する人々の生活の特徴を（具体的な観察内容を示して）考察する。」である。

2. 研究方法

1) 研究対象：平成18～22年度の間に2年次履修となった4学年のうち、研究協力を依頼し同意を得た1学年76名。

2) データ収集期間：実習終了4ヶ月後。

3) データ収集方法：実習後に提出された学生のレポートからデータ収集を行った。学生に対しては、レポート返却時に研究協力依頼書を用いて説明した。研究に同意が得られた学生のレポートのみ、事務局に設置した回収用ボックスに提出してもらった。研究に対する同意書は、協力学生の匿名性を保つために使用せず、複写レポートの提出により同意が得られたものとした。

4) データ化：学生から提出されたレポートの記述内容から、学生が住民の生活の特徴をどのように理解したのか記述された内容を、学生の学習成果、すなわち対象理解の学びとしてデータ化した。

5) 分析方法：データの意味内容を読み取り、類似する内容を集めた。そしてそれぞれの類似する内容の特徴から、カテゴリの名称をつけた。そして各カテゴリが示す山村地域の住民の生活の特徴を検討した。

5) 分析の信頼性・妥当性の確保：分析後、共同研究者間でカテゴリを確認し、分類の適切性を検討した。

3. 倫理的配慮

1) 対象者の自由意思での研究参加

対象者へは研究協力依頼書を用いて、研究の意義・目的、方法、予測される利益と不利益、個人情報保護とデータの保管方法、研究成果の公表、研究参加の任意性を説明した。それにより同意が得られた学生のレポートのみを対象とした。

2) 個人情報の保護

学生のレポートの記述内容に個人が特定される

ようなデータの記載がある場合には、個人が特定されないように記述を修正した。

3) 予測される利益と不利益

学生への研究協力依頼のために、授業終了後10分程度研究協力依頼の説明を行った。研究の意義と目的を伝え、時間的な制約等がある場合については、途中退室は自由とした。また対象が学生であるため、本研究が学科目の評価には全く影響しないことを説明した。データ使用後は、レポートは鍵のかかる場所に保管し、第三者の目に触れないようにし、研究終了時にはシュレッターを用いて速やかに廃棄した。本研究の実施にあたっては、群馬県立県民健康科学大学倫理審査委員会の承認を得た。

III. 研究結果

1. 対象理解の学びのカテゴリ

回収したレポート数は60であり、回収率は78.9%であった。レポートから抽出した対象理解の学びに関する記述内容は218であり、これらは15カテゴリ【住民同士の繋がりや交流の強さ】【若い人が少なく高齢者が多い町の人口構成】【地域の歴史や文化を大切にする気持ちや行動】【交通機関が少ない生活の不便さ】【自然が厳しい気候や土地の形状】【生活を不便と感ぜない住民の意識】【生活を補完する隣近所の手助け】【不便さを補う行政サポート】【医療機関や店が少ない生活環境】【地域で生活する人々の活気】【不便さを補う自給自足の生活】【医療アクセスの乏しさに対する健康自己管理意識の高さ】【他者への親しみやすい住民性】【自然を生かした地場産業と経済基盤】【季節で異なる住民の労働】に集約できた。表1に各カテゴリと学生の記述内容及び記述件数を示す。

2. 各カテゴリが示す住民の生活の特徴

1) 【住民同士の繋がりや交流の強さ】

学生は、町健康教室や介護予防教室、デイケ

表1 対象理解のカテゴリと学生の記述内容

n=76

カテゴリ	学生の記述内容 (例)	記述件数
住民同士の繋がりや交流の強さ	<ul style="list-style-type: none"> 小さな町の人々は、町全体の人々と顔見知りであり、知り合いでもあるため、コミュニケーションがさかんである 町の人々が皆知り合いなので、健康教育などを開催しても声を掛け合って参加してもらいやすい環境がある 数多くのお祭りがあり、近所づきあいがさかん 若い人は村からでてしまうので、高齢者同士の支え合いから繋がりが強くなっている 住民同士の付き合いが多いので、ほとんどが顔見知り 	35
若い人が少なく高齢者が多い町の人口構成	<ul style="list-style-type: none"> 町に高校がなく、仕事も少ないため、子供たちは町外に出て進学し就労するようだ 	28
地域の歴史や文化を大切にす気持ちや行動	<ul style="list-style-type: none"> 村の人たちが、寺や建築物、祭りなど歴史を大切にしている 若い人がいなくても、自分たちが町を大切にしていこうとする気持ちは、高齢者の活力に繋がっている 地域の歴史的文化的建築への思い入れが強い住民が多く、交代で掃除を引き受けている 過去の自然災害の歴史体験を大切に、引き継ぎ、守る活動を住民が行っている 	26
交通機関が少ない生活の不便さ	<ul style="list-style-type: none"> 町に高校がなく、仕事も少ないため、子供たちは町外に出て進学し就労するようだ 	25
自然が厳しい気候や土地の形状	<ul style="list-style-type: none"> 交通手段は少なく、高齢者は徒歩である。急な坂道や冬場は雪が多く大変そう 山間部で坂や曲がり道が多く、平地が少なかった 	19
生活を不便と感じない住民の意識	<ul style="list-style-type: none"> 住民は不便さを感じていない 大きな病院がなくとも住民は不便さを感じていない 	15
生活を補完する隣近所の手助け	<ul style="list-style-type: none"> 車を持っていなくても、隣近所の人たちがスーパーまで連れてくれるという隣近所の連帯感・支え合い 不便であっても、車のある人が乗せてあげるなど、隣近所の交流や繋がりが、支え合いにより受診できる 僻地であっても、工夫したり、支え合うことで暮らしの不便さがない 僻地では、近隣の人々からのサポートが多い 店は少ないが、自作のものを近所で分け合い協力し合っている 	12
不便さを補う行政サポート	<ul style="list-style-type: none"> 交通機関が少ないが、イベントや定期的な診療所受診などの際に村が無料のバスを出しているため困らない 一人暮らしの高齢者は、近くにお店が少ないので、行政が家庭訪問を行ったり、食事配給を行ってサポートしている 	12
医療機関や店が少ない生活環境	<ul style="list-style-type: none"> 大きな病院へは隣町まで行かなくてはならない 診療所が村内に3ヶ所しかなく、大きな病院へは村外の遠いところに行かなければならない 小児科や産婦人科での出産ができず、受診時は村外へ行かなければならない 	11
地域で生活する人々の活気	<ul style="list-style-type: none"> インタビューしたお年寄りが、皆親切で明るく元気だった。村全体が穏やかでのんびりしている 	9
不便さを補う自給自足の生活	<ul style="list-style-type: none"> 店は少ないが、皆畑で自給自足しており、買い物に困っていない スーパーなど近くにないが、その分自給自足したり、引き売りがある 	8
医療アクセスの乏しさに対する健康自己管理意識の高さ	<ul style="list-style-type: none"> 病院が近くにないために健康への自己管理の意識が高い。診療所には不必要に高齢者がいない 住民の「足が悪いが病院にすぐいけないので、家で体操する」と言う言葉から、僻地で病院の少ない地域の住民は、健康を守る行動を主体的にとっている人が多いと感じた 住民は医療機関へのアクセスが悪いため、健康を保つために食事や運動への関心が高い 	5
他者への親しみやすい住民性	<ul style="list-style-type: none"> 住民がとても温かい雰囲気。話しかけると楽しそうに話してくれる住民性を感じた 	5
自然を生かした地場産業と経済基盤	<ul style="list-style-type: none"> 村では高原野菜や温泉やスキーなど、自然を生かした中心であり、住民の就業に影響している 	5
季節で異なる住民の労働	<ul style="list-style-type: none"> 夏は土地を活かしたキャベツなどの農業を行っているが、冬は寒く雪も多いため農業は行わず、スキー場で働く人が多い 	3

アなどの事業に参加し、住民同士の交流の様子を観察し、また町の観察途中に出会った住民へのインタビューから、祭りなどの様々な行事を住民が協力して行っている様子を観察した。そして「小さな町の人々は、町全体の人と顔見知りであり、コミュニケーションがさかんである。」「町の人々が皆知り合いなので、お祭りや行事など近所づきあいがさかん。」「みんな顔を知っているし、親類以上の関係と言う。」などと記述していた。すなわち【住民同士の繋がりや交流の強さ】を持っていることを理解していた。

2) 【地域の歴史や文化を大切にす気持ちや行動】

学生は、「町で立ち寄った寺などの建築物が、手入れが行き届いている。」ことを記述していた。また住民へインタビューした結果から「若い人がいなくても、町の祭りや建築物、行事を愛して大切にす気持ちが、寺の手入れに繋がっている。」「山の噴火の経験から、観音堂をととても大切にしている。毎月2回念仏行事を行ったり、観光客に説明したり村全体で守っている。」などと記述していた。すなわち【地域の歴史や文化を大切にす気持ちや行動】が住民にあることを理解していた。

3) 【生活を不便と感じない住民の意識】

学生は、車中の観察から「住民が利用するスーパーやコンビニをほとんど見なかった。」が、そのことを住民にインタビューしたところ、「隣近所の人と一緒に連れて行ってくれるなどしているため、近くになくても、住民はあまり不便だと感じていない。」と記述していた。また「大変そうだと思っていたが、村の人たちはこの村が好きで生活が大変と思っていず、この村の生活自体を楽しんでいた。」などと記述していた。住民は現状の生活が当たり前であり、不便とは思っていないという、学生の先入観と住民の考えとのずれを感じたことで、【生活を不便と感じない住民の意識】があることを理解していた。

4) 【生活を補完する隣近所の手助け】

学生は、「不便であっても、車のある人が乗せてあげるなど、支え合いにより受診できる。」「店は少ないが、自作の農産物などを近所で分け合い協力している。」「お年寄りが多いことから移動スーパーマーケットがあり、食料を車で売りに来るシステムがある。」などを住民へのインタビューから記述していた。すなわち【生活を補完する隣近所の手助け】が町にはあり、住民の生活が支えられていることを理解していた。

5) 【不便さを補う行政サポート】

学生は、住民へのインタビューから「村に1つしかない診療所に無料のバスがあり、それを利用し通っている。」などと記述していた。すなわち学生は、住民が【不便さを補う行政サポート】を活用していることを理解していた。

6) 【地域で生活する人々の活気】

学生は、町でインタビューした多くの住民は高齢者であったが、「村全体がゆったりとした時間が過ぎていき、お年寄りは多いがとても元気で明るい村だった。」「お年寄りが多くて元気で明るいことが村の強みである。」などと記述していた。すなわち【地域で生活する人々の活気】を理解していた。

7) 【不便さを補う自給自足の生活】

学生は、住民へのインタビューから、「多くのお年寄りは、自宅で農作物を栽培したり、売ったり食べたりしている。」などと記述していた。すなわち【不便さを補う自給自足の生活】を、健康を維持する上では好ましい側面と捉え、対象を理解していた。

8) 【医療アクセスの乏しさに対する健康自己管理意識の高さ】

学生は、住民へのインタビューから、「すぐに病院へ行けないので、病気にならないように身体を動かしたり、食事に気をつけたり、健康管理の意識が強い。」などと記述していた。すなわち【医療

アクセスの乏しさに対する健康自己管理意識の高さ】を、健康を維持する上では好ましい側面と捉え、対象を理解していた。

9) 【他者への親しみやすい住民性】

学生は、「村の人々はすごく温かい感じだった。」「近所の人はもちろんのこと、知らない人にも応えてくれ、話をすれば本当に楽しそうに何でも話してくれ、そこに住民性を感じた。」などと記述していた。すなわち【他者への親しみやすい住民性】を、健康を維持する上では好ましい側面と捉え、対象を理解していた。

10) 【自然を生かした地場産業と経済基盤】

学生は、観察から「家も大きく美しい町並みで、村の財政状況が豊かであると感じた。」「道の駅には村の特産物のヨーグルトや新鮮な野菜が売られ、ブルーベリーやりんご狩りなどの観光にも力を入れている様子がうかがえた。」「空気がおいしい、水がきれい、自然が豊という利点を活かした産業が栄えている。」などと記述していた。すなわち住民の生活は【自然を生かした地場産業と経済基盤】により維持されていることを、健康を維持する上では好ましい側面と捉え、対象を理解していた。

11) 【若い人が少なく高齢者が多い町の人口構成】

学生は、町の観察や住民へのインタビューから、「町を歩いても出会うのはほとんど高齢者であり、若者と呼べる人は見なかった。」「町内に高校が1つしかないため、進学は町外に出る。」「仕事もないためそのまま町外で就職する。」「新しい人が入ってこないため高齢化がすすんでいる。」などと記述していた。すなわち住民の生活環境は【若い人が少なく高齢者が多い町の人口構成】で成り立っていることを理解していた。

12) 【交通機関が少ない生活の不便さ】

学生は、町の歩道を歩きながら、バスの停留所の時刻表を観察し、「電車やバスが1時間に1本しかなく、自家用車が交通手段となっている。」と

記述し、また住民へのインタビューから「村のいくつかの診療所へは、車やタクシーを使わないと行けないため不便である。」などと記述していた。すなわち住民の生活は【交通機関が少ない生活の不便さ】により制限されていることを理解していた。

13) 【自然が厳しい気候や土地の形状】

学生は、「急な坂道や雪が多いため、徒歩でも車でも大変そうだった」「雪がすごいと外出できないため天候に左右されて大変だと感じた。」「標高差が大きく寒冷であり、ホームセンターには長靴や除雪用具が多かった。」「車での移動中、崖の上のつららを見て、どれだけ寒いのかと実感した。」などと記述していた。すなわち住民は【自然が厳しい気候や土地の形状】の中で生活していることを理解していた。

14) 【医療機関や店が少ない生活環境】

学生は、観察した町の様子や住民へのインタビューから、「お店がほとんどなく大変そうだった。」「小児科がなく、都市部に受診しに行っている。」などと記述していた。すなわち【医療機関や店などが少ない生活の不便さ】の中で生活していることを理解していた。

15) 【季節で異なる住民の労働】

学生は町の観察や住民へのインタビューから、「夏は土地を活かしたキャベツなどの農業を行っているが、冬は寒く雪も多いためスキー場で働く人が多い。」「暖かくなると朝早くから夜遅くまでしっかり働いて蓄えをつくり、冬は家でゆっくり過ごしている。」などと記述していた。すなわち【季節により異なる住民の労働】と必要とすることを理解していた。

IV. 考 察

近年、わが国では在宅療養の推進により、高度な医療ケアが必要な段階でも病院から退院して家庭で療養し、外来を受診しながら療養生活を行う

ケースが増えている。そのため外来で対応する継続看護での看護の役割機能が期待されている。看護の対象は、妊娠中、乳児期から高齢者までの多様な発達段階や、健康増進から疾病予防の段階から終末期までの多様な健康レベルにあるものが含まれる。看護職には対象がどのような段階あるいはレベルにあっても、看護の目的、役割や社会背景を反映した援助を展開する。そのことを通じて、療養生活と労働や学校などを含めた社会生活や、医療制度や治安等の環境条件と調和を図りつつ、自分らしい生活ができるように機能すると言われて¹⁴⁾。また近年では生活習慣病の罹患による医療費の増大化が社会で大きな問題となっているが、このような生活習慣病をはじめとする多くの疾患は、本人が問題を認識しても、本人を取り巻く家庭内外の環境から影響を受けている場合が多く、そのような生活環境では対処が難しい場合も多い。また健康に影響する対象の価値観やそれに基づく生活行動も、周囲の生活環境と密接な関係があり、どのような生活背景をもとに形成された生活行動なのかを理解することなく、行動変容を促すことは難しい。丸谷は看護職の行う援助においては、個別の情報だけでなく、地域に特徴的な生活習慣や価値観などの地域情報を豊富に把握し、そこに個別情報を組み合わせて行くことで、生活に調和した指導が行えると述べている¹⁵⁾。

学生は山村僻地に出向き、そこに住む人々の歴史、文化や生活環境を観察し、あるいは住民へのインタビューから情報を集め、それらは多様な側面から、看護の対象である人々の健康を維持する上で影響を与えている、ということの理解に繋がったと考える。

すなわち、対象理解の学びとして【若い人が少なく高齢者が多い町の人口構成】や【交通機関が少ない生活の不便さ】【自然が厳しい気候や土地の形状】などを捉えた。これらは住民の生活環境は健康に大きく影響するが、健康を維持する上で

不利な側面もあるということを理解する、という学びである。このような過疎地域における住民の生活上不利な側面の生活実態は指摘されているが¹⁶⁾、一方では対象理解として【住民同士の繋がりや交流の強さ】【地域の歴史や文化を大切にする気持ちや行動】【生活を不便と感ぜない住民の意識】など、生活環境は住民の健康に大きく影響するが、健康を維持する上で好ましい側面もあるということを理解する、という学びである。本実習での学生の学びから、学生は山村僻地という、普段学生が生活経験のない地域に出向き、生活環境の把握や、地域の文化や価値観が醸成された住民の考え方があることを知る。そしてそのことから地域の特徴を理解し、それらの生活環境に対象が適応し、健康を維持している事を学んでいた。学生には不便そうな生活であっても、住民は満足して生き生きとしている様子から、その生活に適応して健康を維持しているという事を実感し、対象理解を深める事に繋がっていたと考えられる。

本実習の成果として、学生は大学2年次の看護専門基礎科目と並行する早い段階から、住民の生活環境そのものを観察することで、今後学習する全ての看護の基礎となる、看護過程の展開に必要なアセスメントの情報として、幅広い視点を持ち、対象を理解する視野が広がったものと考えられる。はじめに述べたとおり、多くの大学で2年次頃に実施される基礎看護の実習において、生活者としての対象理解を深めるために、家庭訪問実習を行うという報告がある^{17,18)}。渡部はその著書の中で、対人援助者が修得しておかなければならない技術として人間とその人を取り巻く環境との関係に関する知識を基盤として挙げている¹⁹⁾。一方看護基礎教育において、地域の情報を幅広くアセスメントして地域の健康問題を明確にするプロセスを体験する地域診断実習の必要性は従来から指摘されている²⁰⁾。現在多くの4年制大学が、地域看護学に関連する実習に地域踏査を含む地域診

断実習を組み入れている。しかし多くの大学は地域踏査をはじめとするこれらの地域診断の実習は、3年次以降の専門科目における看護の展開過程での実習の中で行われているものである²¹⁻²³⁾。

本実習は地域看護学のみならず、基礎看護をはじめとする他領域看護の展開実習において、対人援助者が修得しておかなければならない技術として有効な、看護の対象理解の視野拡大に繋がるものとする。

V. 結 論

山村における地域看護学実習の成果を、看護の対象理解の視野拡大を目指す学習活動の意義という観点から検討した結果、学生の対象理解の学びとして15のカテゴリが抽出され、それらは山村地域の住民の生活の特徴を示すものであった。学生は人々が居住する地域の歴史、文化や生活環境は、多様な側面から看護の対象である人々の健康を維持する上で影響を与えている、ということを理解していた。

本実習において2年次専門基礎科目の学習と並行する時期に、山村僻地という生活環境の特徴的な地域に出向き、人々の生活や環境を観察し、健康との関連を捉える実習を行うことは、看護の対象理解の視野を拡げる学習活動として意義を持つと考えられた。

引用文献

- 1) 日本看護協会監修：新版 保健師業務要覧第2版，日本看護協会出版会；pp.41-42，2008
- 2) 看護の在り方検討会：4年制大学の卒業時の到達目標，2004
- 3) 堀井直子，新美綾子：在宅看護実習における療養生活に関する学生の学び—療養者宅で過ごした体験を通して，日本看護医療学会雑誌，7(1)；45-46，2005
- 4) 平尾恭子，山田和子，熊谷幸恵ほか：在宅看護実習におけるQOLを考慮した看護活動に関する学び，和歌山県立医科大学保健看護学部紀要，1；71-78，2005
- 5) 波止千恵，原田弘枝，岡崎美智子ほか：在宅看護実習の指導内容，九州厚生年金看護専門学校紀要，1；45-50，2000
- 6) 成瀬和子：在宅看護実習におけるケアアセスメントツール使用の有用性の検討，聖路加看護大学紀要，27；59-63，2001
- 7) 大西洋子，大澤真奈美，春山早苗ほか：地域看護学教育における家庭訪問実習の学びの分析による実習方法の検討，群馬県立医療短期大学紀要，10；117-125，2003
- 8) 長谷川喜代美，大西洋子，大澤真奈美ほか：家庭訪問実習のカンファレンスにおける教員の指導方法，群馬県立医療短期大学紀要，11；113-131，2004
- 9) 古田加代子，佐久間清美，興水めぐみほか：地域看護実習における学生の家庭訪問からの学び，愛知県立看護大学紀要，13；33-49，2007
- 10) 蓮井孝子：対象理解を深めるための在宅看護実習方法とその学習効果についての文献研究，川崎市立看護短期大学紀要，13(1)；17-20，2008
- 11) 小林美奈子：生活者としての対象理解を目指した基礎看護実習の学びの分析，日本看護協会第35回看護教育論文集；2004
- 12) 吉川洋子他：基礎看護実習における生活者としての対象理解—「全体像」の分析を通して—，第29回日本看護学会論文集，看護教育；1998
- 13) 横田修二，宮堀真澄，高橋郁子：成人看護実習における健康増進センター実習の学び，日本赤十字秋田短期大学紀要，12；122-129，2007
- 14) 丸谷美紀：看護職が行う健康相談における看護の機能と課題—健康相談に関する文献検討を通じて—，千葉看護学会誌，11(1)；46-54，2005
- 15) 丸谷美紀：健康相談における対象理解の方法—生活との調和を重視した健康問題への対処，

- 千葉看護学会誌, 12(1); 22-28, 2006
- 16) 藤川あや, 飯吉令枝, 平澤則子ほか: 過疎地域における高齢者の生活の自立において困難な
ことと地域支えあいの実態, 第39回日本看護学
会地域看護論文集; 119-121, 2008
- 17) 前掲書11)
- 18) 前掲書12)
- 19) 渡部律子: 対人援助者に必要な基盤「人間と
その人を取り巻く環境との関係に関する知識」
基礎から学ぶ気づきの事例検討会, 中央法規;
pp.28-62, 2007
- 20) 中村裕美子: 大学教育での地域診断への取り
組み, 保健婦雑誌, 55(9), 736-741, 1999
- 21) 大須賀恵子, 深澤恵美, 若杉里実ほか: 踏査
を導入した地区診断の学習成果と今後の課題,
保健婦雑誌; 58(6), 506-511, 2002
- 22) 池田智子, 美ノ谷新子, 松下裕子ほか: 学生
の視点による地区踏査実習, 保健婦雑誌,
59(10); 960-967, 2003
- 23) 西嶋真理子: 地域看護実習における地域看護
診断の学習過程, 日本地域看護学会誌, 9(2),
98-105, 2007

**Learning Outcomes of a Community Health Nursing
Practicum in Mountainous Regions :
Significance of Learning Activities that
Broaden Understanding of Residents**

Manami Osawa, Miyuki Suzuki, Akemi Shionoya,
Mitsue Iida, Miyako Hara, Motoi Saito
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objectives : In the present study, we investigated students' learning outcomes in a community health nursing practicum in a mountainous regions in order to clarify the significance of learning activities that broaden students' understanding of residents.

Methods : Learning outcomes related to students' understanding of residents were extracted from reports collected at the end of the practice from students who consented to participate (collection rate, 78.9%).

Results : Learning outcomes were organized into the following categories : (a) the inconveniences of living in an area with limited transportation ; (b) the thoughts of residents who do not feel that their lifestyle is inconvenient ; (c) mutual assistance between neighbors to address daily inconveniences ; (d) the vitality of people living in regional communities ; (e) feelings and behavior that value regional culture ; and (f) the strength of links and exchange among residents.

Conclusions : Community health nursing practicum in mountainous regions had students' learning outcomes that broaden students' understanding of residents.

Key words : community health nursing practicum, understanding of residents